



# 園長だより NO29

どこまで続く乾燥気候、一雨降ってもらいたいと願わずにはられません。子ども達のインフルエンザ感染も落ち着きを見せてきました。ただこのまま湿度の低下、乾燥が続くと新たな感染症が流行する兆しもみえます。

衛生管理にはより一層気を配りながら健康な生活維持に努めましょう。



**もうすぐ平成が終わります。保育業界は激動の時代でした。**

もうかなり前のこと、幼稚園で働いていた時のことです。時は2000年(平成12年)だったと記憶します。

国が保育業界に規制緩和をかけ株式会社の参入を可能にしました。幼稚園で働いていた私にとっても大きな衝撃です。「えっ ありえないでしょう」と瞬時に思ったものです。

保育園は主に行政(公立)と社会福祉法人により運営されていました。

株式会社の参入により保育園は市場競争主義の導入を強いられ「利用しやすい保育園、選ばれる保育園」として利用者本位のサービス提供を求められ、民間営利企業との競争に加え過剰なサービスの提供を行う保育園が出てきた。一攫千金のチャンスを狙う企業もあり子ども達を人とみず、商品とみる。そんな考えで創設する保育園もあった。

当時、ある新聞に保育園、理事長のコラムでこんなことが書かれていた。

「利用者本位」とあるが利用者とは誰だろう、保育園には「預ける親」と「預けられる子ども」がある。行政の施策を見る限りでは預ける側の都合を最優先させるものばかり、「延長保育、病後児保育、日曜、祝日保育、一時預かり、子育て相談、児童虐待への対応等」さまざまな施策が考え出された。

保母(当時の名称)は疲労困憊、息切れ症候群であると掲載されていた。

現在も保育時間は11時間開所を皮切りに12、13、15時間 24時間と休む間なく保育園を開所しているのが現状です。

## 利便性が生み出す、保育者の苦悩

コラムには北九州の主任保育士の訴えも掲載されていた。

「生活の利便性のみが追及される消費社会の中で人を育てるという営みまでもが利便を提供する方向へ傾き、子どもから遠ざかる親その影響から愛の充足感も自分への信頼感も持つことができず、さまざまな症状をみせる子ども達を前に私たちは育児放棄に加担しているのではないかと悩んでいます。」と

私は数年後に保育園に転職することになり、北九州の主任保育士の訴えと同じ思いを抱くことになりました。

時代の背景と共に便利な世の中になり、利便性を追求するのは当たり前、ただ、できる事とできない事の良し悪しはつけなくてはならない。 昨今、「子ども(子ども達の)の最善の利益」を願い、考えて保育がなされていく。

主任保育士の訴えにあった、人を育てる営みまでが利便に傾くことは避けたいと強く感じる。

## あきらめることなく

日本の保育園は行政の管理、が厳しいと言われる。当時の規制緩和で市場主義が保育行政の抱える多くの問題を解決してくれると考えたのだろうか。

欧州は日本の在り方と異なる、日本と同じように出生率の低下や深刻な子どもの問題があるが「子どもへの視点」が施策に反映されていた。

子を持つ親の働きを見直し、安定した家庭生活が成立するよう働き方を変化させた。

午後4時頃には男女とも職場を離れる。子どもが病気になったら職場を休める。夕方、5時には子ども達は保育園にいない。今から十数年前のことである。人を大切にする、家庭生活が成り立つ働きに取り組んでいたのです。

日本では考えられないことです。人の幸せを考える国でありたいのですがなかなか最善の施策を打ち出してくれません。フランスやドイツに比べ労働時間も長い、長時間の労働が安定した家庭生活の築きの妨げになっています。

せめて現場が頑張らねば、子ども達のことを思い、より良い成長を願う保育士が子ども達との生活で起こる問題の本質をとらえて解決に導けるように努めたいものです。

新たな年号を迎える日も近いが次の時代は良い意味での激動の時代にしたいものです。

## 劇を考える。

最近、他園の保育士と話す機会があった。切実な思いを抱いていた。「発表会」をひとつの行事としてとらえ、どうこなしていけばよいのかと考えてしまうと言う。

建前は良いことを言ってしまうが現実には子ども達に教え込み、見栄えのする結果に導こうとしてしまう。保育士としては実にしんどいことである。今更ながらできるだけ保育士自身の意識変化が大切と伝えた。毎日の生活で劇を作り出す、芽(要素)があることが大切ですと、日常の遊び、ごっこあそび、劇の要素を盛り込んだ寸劇等、なりきり遊んだり、自由に遊び込まれるような毎日の生活をできるだけ心がけ作っていくことが大切です。

発表会当日まで時間は限られているだけに、意識変化はそう容易いことではありません。

劇というとセリフにとらわれ、それを覚え、間違わずに取り組んでいくことを考えがちである。劇や遊戯をじょうずにやることよりも子ども達が、みんなで自分たちの劇を作り上げていくことが大切であると考え、取り組んでほしいと願う。

それぞれの園が異なる文化、活動へ取り組んでいるが子ども達としっかりと向き合い、保育士主導、保育士よがりの活動から抜け出してもらいたい。保育士の悩みが解消できたか定かではない、またの機会にその後の取り組みをたずねてみたい。

(園長 廣部信隆)